

Title	ラ・フォンテーヌ, 『ペストにかかった動物たち』における円環構造
Author(s)	石井, 啓子
Citation	Gallia. 24 P.13-P.23
Issue Date	1984
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/10644
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

ラ・フォンテーヌ、『ペストにかかった 動物たち』における円環構造

石井啓子

〈はじめに〉

『寓話詩』第一集から十年を経て発表された第二集は、Avertissement での fabuliste 自身の予告通り、それまで専ら Ésope に依っていた主題が広がり、⁽¹⁾それに伴って「別の趣向」⁽²⁾が様々に凝らされ、第一集との間に大きな変容の跡をしるすことになる。

しかしその変化も、*Discours à Madame de la Sablière* をはじめとする「もはや寓話とはいえない」⁽³⁾寓話数篇にみられるようなものと、「物語」(corps)と「教訓」(âme)という二つの要素を備え、一見して寓話の体裁を保っている大半の寓話のそれとを、ひとまず区別して考える必要があるだろう。

実際には、Ésope から離れてきたとはいえ、一篇ずつの寓話の「結末」で、登場人物の様々な力関係が決定する「運命」によってひきおこされる悲喜劇が、一種の処生訓として「教訓」に直結してゆくという、第一集にみられた基本的な形は、実は第二集においても大半の寓話に忠実に引き継がれているのである。⁽⁴⁾

問題は、そのうえで、それらの中にもなお、ある変化を認めずにはいられないという事実である。

寓話そのものが変わったのではなく、寓話というジャンルに特有の一貫した創作形態を「表」とすれば、その「裏」面に進行していったもうひとつ別の作品空間の創造という二重性の中で、その変化の本質を捉えることはできないだろうか。

本論ではその一つの試みとして、第二集の冒頭を飾る *Les Animaux malades de la peste* (7-I) を例にとり、他のいくつかの寓話にも共通してみられる「円環」の構造をとりあげ、そのしくみを分析してゆきたい。

I. 物語の「はじまり」、「おわり」と「教訓」

Saint-Marc Girardin や Chamfort など古い批評家達が既に chef d'œuvre の賛辞を惜しまなかったこの寓話⁽⁵⁾は、その入念な構成によって、第二集の寓話の特質を、様々な意味で先取りした一篇であると思われる。

Un mal qui répand la terreur,

Mal que le ciel en sa fureur
Inventa pour punir les crimes de la terre
 La peste(puisqu'il faut l'appeler par son nom),
 Capable d'enrichir en un jour l'Achéron,
 Faisait aux animaux la guerre.
 (強調は引用者)

「地上の罪」を罰する為天が動物達の間にはペストを蔓延させたいきさつが語られ、物語の幕が開く。

ペスト禍の混乱が続く中で、ライオン王は会議を開き、各々が良心に基いておのれの罪を告白し、最も罪深いものをいけにえとして天に供することを提案する。

まず自ら、羊のみならず、羊飼いをすら貪り食ったと告白したのに続いて他の動物達にも自分の例にならうように促してゆくのである。

狐、虎、熊など、いづれも「聖人気取り」で拍手喝采をうけての懺悔が続き、いよいよロバのおでましとなる。

<Je tondis de ce pré la largeur de ma langue.
 Je n'en avais nul droit, puisqu'il faut parler net.>

と、いい気の告白ごっこのはずが突如急転し、

A ces mots on cria haro sur le baudet.
 Un loup quelque peu clerc prouva par sa harangue
 Qu'il fallait dévouer ce maudit animal,
 Ce pelé, ce galeux, d'où venait tout le mal.
 Sa pécadille fut jugée un cas pendable.

という「結末」をうけて、

Selon que vous serez puissant ou misérable,
 Les jugements de cour vous rendront blanc ou noir.

という「裁きの場」での「教訓」をひいて寓話は完結しているのである。

ところでこの種の「結末」と「教訓」とは決して目新しいものではない。第一集でÉsope 寓話に範をとった*La Grenouille qui se veut faire aussi grosse que le Bœuf* (1—Ⅲ)

や、*Le Corbeau voulant imiter l'Aigle* (2—XVI) の中で、お腹をふくらませすぎてパンクした蛙や、羊の毛に足をからませて捕まったカラスの物語が《*Le monde est plein de gens qui ne sont pas plus sages.*》とか、《*Il faut se mesurer, la conséquence est nette.*》といった一般的なお説教によって結ばれていたのと全く同じしかたで、お偉方の尻馬に乗った馬鹿なロバを警えとした明快な処生訓をひいてこの寓話も同様の完結を示しているといえよう。

しかし、果たして、この「結末」で、そもそもの発端となった天の怒りはとけ、ペストの猛威はおさまったのであろうか。実はその点について私達読者は何一つ知らされてはいないのである。地上でのいけにえ選びの解決は、果たして物語の「はじまり」で語られていた「地上の罪」「天の怒り」という問題に対する根本的解決になっているのであろうか。

II. crimeとpéché

そもそもの「地上の罪」「天の怒り」という問題が何故このような結末に移っていったのだらう。そこの移動を分析してみよう。

pesteは、戦い、飢えとともに天の与えたもう三つの災厄、*trois fléaux de Dieu*の一つである。⁽⁶⁾この寓話の「はじまり」の部分も従ってこの一般的な罪と罰という因果関係をふまえたもの、と考えることができるだろう。

ライオンの演説をみてみよう。

《*Mes chers amis,*
Je crois que le ciel a permis
Pour nos péchés cette infortune.
Que le plus coupable de nous
Se sacrifie aux traits du céleste courroux.》

もともと《*crimes de la terre*》と示されていた、「罪」を指す語が《*nos péchés*》という表現に入れかわっていることに注意しよう。

一見何気ないこの云い換えは、物語の流れの中で、実はある特別な意味をもつとは考えられないだろうか。

というのも《*nos péchés*》と云われた途端、本来なら *coupable* か否か客観的事実として裁かれるべき地上の行状が、《*l'état de notre conscience*》との関連によってはかられる曖昧なものとなってしまったように思われるからである。その上での比較に基く《*le plus coupable*》という最上級の限定は果たして可能なのであろうか。péchéという言葉には、「懺悔」がそのままpéchéの贖いになるというcrimeとは違った性質はないだろうか。

Furetièreによれば、crimeはDévotionの言葉として《*se dit de tous les péchés*

qu'on a commis contre Dieu, soit grands, soit petits.⁽⁷⁾》と定義され、péchéと重なりあう部分もあり、換言可能な言葉ではある。しかし基本的な定義においては根本的な違いがあることを見逃すわけにはゆかない。

crimeとは《Action faite contre la loi, soit naturelle, soit civile. Il n'y a point de crime qui ne soit puni, soit en ce monde, ou en l'autre.⁽⁸⁾》と記されている通り、因果応報の罰を免れえない「罪」なのである。

それに対してpéchéはどうか。《Contrevenition aux commandements de Dieu et de l'Eglise》である。そして《La Confession sacramentale est le remède au péché, on y reçoit l'absolution de ses péchés, les péchés y sont remis.⁽⁹⁾》との説明が示すように、告解により赦免をうけることのできる「罪」なのである。

赦されることのない罪と赦されうる罪と、La Fontaineのこの二つの言葉の使いわけも実はかなり意図的なものであると思われる。

ライオンの残忍な行為を告白されて、へつらいを隠そうともせずに、狐は、

Eh bien! manger moutons, canaille, sottte espèce,
Est-ce un péché? Non, non: (...)

と、péchéという言葉を用いて言下にその罪状を否認しているのである。

それに対してロバが断罪される場面ではどうであろう。教会領の草をほんの少し食んだという行為の告白をうけて、《quel crime abominable!》との罵声が浴びせかけられる。

もはや告解によって赦免されることのない、良心に基く懺悔の通じない、法的な裁判へといつしか状況は移っているのである。最後にはロバの行為は《forfait》、大罪の烙印をおされるのである。

ライオンによるcrimeのpéchéへのすりかえ、そしてロバに対する裁きの中での péchéからcrimeへのすりかえが、ともに物語の「はじまり」から「おわり」へのズレに一役買っていたことになる。

本来神に対する罪として、むしろ絶対的であるはずのpéché、それに対してこの世の法という可変的な基準に従う、どちらかといえば相対的なcrime。しかし神の存在を離れた途端、本来神に対する罪péchéは、告白の真の聞き手である神のぬけがらの前で形骸化し、恣意的な代理の聞き手による、《les moins pardonnables offenses》ですら赦される、告白ごっこの「罪」となり、逆にcrimeの方が裁く側の絶対的な掟に従って確固とした懲罰の対象として絶対化される。

そもそものはじまりが、「天の怒り」「天の懲罰」の認識であったことを考えれば、天の掟を離れたところで展開される、この「罪」の逆転は、結末における「裁き」かさもなければ、ペストをひきおこした「天」の掟のいずれか一方を否定せざるをえないという自己矛

盾をおこすことになる。

天の怒りが正当なものであったなら、それに対してとられた、puissantか misérableかによって黑白を決めるという地上の措置そのものは再びその怒りの対象となるであろうし、天の怒りがこの「裁き」を認容するものであるならば、そもそも天が fléau を下すその対象となった「地上の罪」とは何であったのかという問いに戻らざるをえないだろう。

一見、ロバの教訓をもって完結しているかにみえるのだが、実はその一方で、未解決のままにされたペストの件が「罪」の問題を抱えてふりだしに戻る。

寓話の「おわり」が実は「おわり」ではなく、再び「はじめ」に戻り、「地上の罪」「天の怒り」という果てしのない cercle vicieux が続いてゆく。寓話の中に、ぐるぐるとめぐっておわりのない円環がこうして一つ結ばれてゆくのである。

Ⅲ. 集団の連帯と個人

crime と péché とのすりかえとは別に、この寓話の冒頭から結末への流れを決定するもう一つの要素として、「いけにえ」という問題に関しておこってくる集団の「連帯」と「個人」との微妙な関係を挙げるができるだろう。

物語の前半と後半では大雑把にあって、動物達を捉える視点が全く異なり、ライオンの演説を境として「動物全体」の問題と、動物の社会の内側の問題との二つ折れの構成になっているのだがその転換のつき目になっているのが「いけにえ」という事柄なのである。

最初の「天の怒り」に続く部分では、動物全体のペストゆえの悲惨が描かれている。

Ils ne mouraient pas tous, mais tous étaient frappés.

On n'en voyait point d'occupés

A chercher le soutien d'une mourante vie;

Nul mets n'excitait leur envie.

Ni loups ni renards n'épiaient

La douce et l'innocente proie.

Les tourterelles se fuyaient;

Plus d'amour, partant plus de joie.

問題にされているのは loups も renards も含めた「すべての動物」である。そしてその悲惨も「食欲」に関するものであったはずが、獲物である la douce et l'innocente proie を契機として、愛の象徴である雉鳩の姿から、愛の消滅、喜びの消滅という、総合的な事柄にまでおしひろげられてきているのである。⁽¹⁰⁾ この「全体」は、天の怒りに対峙しておかれることで一つに結びついているのである。

先に引用したライオン王の演説がここに続くのだが、最初はなるほど、天の怒りを《nos

péchés》に結びつけ、地上の動物、「我々」全体の連帯責任という視点から論じられている。問題になるのはその次の《Que le plus coupable se sacrifie aux traits du céleste courroux》という提案であろう。

「全体」の中で《le plus coupable》一人が限定され「いけにえ」が提案されるのだが、この後、この「一人」の個別化は一層明確になってゆく。次の行では《il obtiendra la guérison commune.》と記され、この「最も罪深き」「一人」が「全体」に奉仕する為のものであることが確認されている。

特定されたこの三人称のilがこの後どのように扱われてゆくのか、ライオンの演説の中での人称指示の語の動きは注目に値するだろう。

Ne nous flattons donc point, voyons sans indulgence
L'état de notre conscience.

と一応「我々」の問題にしているが直後にそのnousの中から《Pour moi…》と「私」の例が示されたあと、

Je me dévouerai donc, s'il le faut; mais je pense
Qu'il est bon que chacun s'accuse ainsi que moi:
Car on doit souhaiter selon toute justice
Que le plus coupable périsse.

と、Spitzerが*L'Art de la transition chez La Fontaine*の中で指摘する通り、巧みに、「私」だけを全体の中から除外することに成功しているのである。⁽¹¹⁾

その結果、「我々全体」であったものがライオンにとって既に他人事となり、三人称を用いた《que chacun s'accuse ainsi que moi》という婉曲な命令の形が可能となり、問題は《chacun》即ち「全体」の中の「個人」のことへ完全に移しかえられているのである。

ライオンの提案の結論である《Que le plus coupable périsse》という一行は、数行前の《Que le plus coupable de nous se sacrifie》を単に繰り返しているようで、実は、「全体」の問題解決の為の手段としての「いけにえ選び」が、それ自体一つの立派な目的となってしまっていることを示している。

自らの身を捧げる代わりとしての捧げものであるべきsacrificeという考え方は、既にここではあてはまらなくなっている。「連帯」のある集団が消え、個々人がその中で較べられ、裁かれるだけの、動物達の単なる寄り集まりの場がそこには残るだけなのである。

愛の消滅、喜びの消滅で示されたような動物全体をおおう由々しさが消え去り、ライオン、狐、狼、ロバ、と個別化された登場人物の力関係による役割分担に従った物語後半へ

の転換はこうして緩かに、しかし着実に準備され、その中のロバの運命という一面に物語は収束してゆくことになる。

狼の弁説に続く三行は、

Manger l'herbe d'autrui! quel crime abominable!

Rien que la mort n'était capable.

D'expier son forfait:

と、自由間接話法で処理されている。狼の言葉の続きのようだが、発話者が限定されていない為、動物全体が一斉に、口々に、ロバに対して浴びせかけている憤りの声、罵声が互いに響きあって、全体の中で孤立したロバをおいつめてゆくことで一つに結束した、無責任な一つの「集団」を新たに浮かびあがらせているように思われる。

「いけにえ」のロバを個別化することで、動物全体が再び天と地というパースペクティブの中に投げ出される。愛や喜びが甦えり、活気が戻ってくる一方で、loupsや renardsが《la douce et l'innocente proie》を狙いはじめるとすれば、その中で再び新しい対立が生まれよう。天に対して、「我々全体」という連帯を保ち続ける一方で、その連帯の中でぶつかりあい、はみだしてくる個々の欲求が必然的に矛盾を生み出すことになる。幻の連帯意識は次々に「いけにえ」を生み出しては結束してゆくという悪循環を続けることになる。

「おわり」が再び「はじまり」に還ってゆくという円環の構造は、個人と集団のかかわりというこの一面においてもやはりこの寓話の中に認められるのである。

IV. 第二集の寓話にみられる円環の構造

*Les Animaux malades de la Peste*は、以上でみてきたように、一見完結しているようで、その反面根本的な問題は何も解決していないという二面性を持ち、同じ過ちが際限なく繰り返されてゆく、この世の営みを映し出すべく、寓話の「おわり」が再び「はじめ」に還ってゆくという、ぐるぐるめぐる円環状の構造を有している。こういった構造は、この一篇に限らず第二集の他のいくつかの寓話にも同様に認めることができるものなのである。

その一つ、*Les Obsèques de la Lionne* (8-XIV) もライオン王の宮廷が場面となる。かつて自分の妻子を惨殺した王妃の葬儀で涙を流さなかったことで咎めをうけた鹿が窮地を脱すべく、王妃が姿を現わして次のように語られた、と弁をふるう。

《Ami, m'a-t-elle dit, garde que ce convoi,

Quand je vais chez les dieux, ne t'oblige à des larmes.

Aux champs Élysiens j'ai goûté mille charmes,
 Conversant avec ceux qui sont saints comme moi.》

これに対して

A peine on eut oui la chose
 Qu'on se mit à crier: 《Miracle! apothéose!》
 Le cerf eut un présent, bien loin d'être puni.

と、めでたし、めでたしの結末をうけて、

Amusez les rois par des songes,
 Flattez-les, payez-les d'agréables mensonges.

と鹿の雄弁と機知に相応しい教訓が示される。

しかし鹿の言葉がsongesでありmensongesであるとするれば、それを裏返したところに真実があらわれてくるはずである。神々との安逸、聖なる人々との語らいのある champs Élysiensに対して、鹿の悲しみとともに、罪あるものが受けるべき償いの世界が垣間みえてはこないだろうか。又 songes, mensongesに依っての、miracle! apothéose!のライオン達の狂躁ぶり、聖なる報いを期待しつつそれに反した行為をとり続ける矛盾した姿は、ペストにかかった動物達同様、神々を相手どったおわりのない罪の円環の中をめぐり続けるものであろう。

また *L'Homme et la Couleuvre*(10— I)では、人間と蛇のいずれが邪悪であるかを決める訴訟沙汰で、牝牛、牡牛、木による証言の結果、敗訴を懸念した人間が

Du sac et du serpent aussitôt il donna
 Contre les murs, tant qu'il tua la bête.

と蛇を殺してしまう。この結末から、

On en use ainsi chez les grands.
 La raison les offense; ils se mettent en tête
 Que tout est né pour eux, quadrupèdes, et gens,
 Et serpents.

と、「お偉方」を避けるよう警告を発して寓話は完結しているのだが、実は結末での行為により人間が再び自らを *pervers, méchant* という形容を免れえぬものとし、物語の「はじめ」に還ってゆくという罪の環が結ばれている。

「証人」達の証言自体が鋭い人間批判になっているのだが、牡牛の言葉は、特に、

On croyait l'[le bœuf] honorer chaque fois quand les hommes
Achetaient de son sang l'indulgence des dieux.

と罪の環の中にいながら、神々に見当違いの赦しを請うことを忘れぬ人間の自己矛盾を静かに暴いていて、興味深いものがある。

この他、《*Il ne faut point juger des gens sur l'apparence*》という教訓と「不均合な⁽¹²⁾」物語をもつ *Le Paysan du Danube* (11-VII) や 《*Ceci soit dit en passant*》と文字通り「ついで」の教訓でしめくくられた *Les Vautours et les Pigeons* (7-VIII) など、他にも例を挙げることができるのだが、いずれにおいても、性懲りなく、同じ過ちを繰り返してゆく、愚かしくも悲しいこの世の営みといったものがその円環の中に浮かび上がってくるように思われる。

le ciel, les dieux と表現は異なるが、これら第二集の多くの寓話が、その円環の構造の中で、地上の世界に相對峙し、絶対的な掟を与える超越的な存在に触れている点も見逃せないことのように思われる。⁽¹³⁾ 神や天がこの円環の中で果たしている役割りも興味深いものである。

物語が、超越的存在に対する地上で展開される時、地上の側では常に、天を、神を畏れ、意識しながらも、結果としては、平然とそれに反した行為を繰り返すというのがほぼ共通したパターンであり、いずれの場合にもそうした地上の営みに対する神や天の応酬について寓話が何一つ語っていないという点も共通したところである。 *une ample comédie à cent actes divers*⁽¹⁴⁾ の、この世と同じ舞台上に登場してきた、第一集の *Jupiter* や *Jupin, Junon*⁽¹⁵⁾ とは違って、これらの神々は黙して語らない。

地上の側が、時に自らの罪をうつし出し、罰を畏れ、一方的にその存在を無視しきれずにいるもの、として、間接的に寓話の中に描かれているだけで、その実体が何であるかはほとんど示されていない。示されているのは、そういう超越的存在を認めつつ、とどまることなく罪の円環の中に入りこんでゆく、人間の消し去り難い不条理とでも称せられるべき行為なのである。

〈おわりに〉

La Fontaine の寓話におけるいわゆる処生訓的教訓が意味をもってくるのはこういう不条理にまで、一旦達した後、それを認めつつ、どうしようもない空しさを抱えながら、な

お生きてゆく上でのせめてもの「教訓」として読まれた場合であろう。どうすることもできないこの世の不条理、或いは、人間の内なる罪とでもいうべきものを一応は完結した寓話の背後に、おわりのない円環の構造の裡に浮かびあがらせることで、こうした処生訓も、新たに生きてくることになるだろう。

寓話の中の二つの創作空間、その「表」と「裏」と、往きつ戻りつ、双方を往復することで、La Fontaineの寓話は、限りなく深い世界を、我々読者に開いているように思われる。

各々の寓話の中の円環の構造は、又互いに関連しあって、一つの大きな環となり『寓話詩』全体が、天と地の間に展開される、人間の様々な営みを、色々な方面から眺めていった結果、一つの集大成として読まれることも可能であろう。最晩年に発表される第三集への歩みをあわせて、La Fontaineにとって、最終的に『寓話詩』がどういう作品として意味をもつものとなったのか、作品全体の中の創作空間に浮かびあがる世界像をからめて、さらに考察を進めてゆきたい。

註

寓話の引用はすべて、La Fontaine, *Œuvres complètes* I, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1954.(以下、O.C.と略す)による。番号(1—Ⅲ)は、第一巻の第三話を示す。又随時 Grands Ecrivains版, Hachette, 1884.も参照した。

- (1) 〈J'ai jugé à propos de donner à la plupart de celles-ci un air et un tour un peu différent de celui que j'ai donné aux premières, tant à cause de la différence de sujets, que pour remplir de plus de variété mon ouvrage.〉 (O.C. p.153)
- (2) Il a donc fallu que j'aie cherché d'autres enrichissements, et étendu davantage les circonstances de ces récits, qui d'ailleurs me semblaient le demander de la sorte.〉 (*Ibid.*, p.153)
- (3) 〈Ainsi, bien des fables de notre recueil ne sont-elles plus des fables.〉 P.Clarac, *La Fontaine*, Hatier, 1969, p.96.
- (4) 拙論, *La Fonction morale du récit ésopeque dans les Fables de La Fontaine*, *GALLIA* XXI—XXII, 1982, pp.18—28.参照。
- (5) Saint-Marc Girardin, *La Fontaine et les fabulistes*, Paris, Michel Lévy Frères, 1867, p.272.

又、Grands Ecrivains版の註によれば Chamfortは、この寓話に 〈le plus beau des apologues de La Fontaine, et de tous les apologues〉との賛辞を与えている。

- (6) Antoine Furetière, *Le Dictionnaire universel*, SNL-Le Robert, 1978. 参照。
 《La peste, la guerre, et la famine, sont les trois fléaux de Dieu》
- (7) *Ibid.*, 〈crime〉
- (8) *Ibid.*, 〈crime〉
- (9) *Ibid.*, 〈péché〉
- (10) 二羽の鳥と愛, 喜びのテーマは *Les deux Pigeons* (9-Ⅱ) の中に繰り返される。
- (11) Leo Spitzer, *L'Art de la transition chez La Fontaine*, dans *Études de style*, Gallimard, Bibliothèque des idées 1970, p.184. 参照。
- (12) Chamfortが指摘, Grands Ecrivains 版の註参照。
- (13) *A Concordance to the Fables and Tales of Jean de la Fontaine*, Cornell Univ. Press, 1974. を参考に dieux, ciel, Dieu の一集, 二集の使用頻度を比べると各々 (29→34) (4→18) (16→30) と, 後者2つの増加が著しい。
- (14) O. C., pp. 115—116.
- (15) Jupiter, Jupin, Junon は第一集の *Jupiter et le Métayer* (6-Ⅳ), *les Grenouilles qui demandent un Roi* (3-Ⅳ), *Le Paon se plaignant à Junon* (2-XVII) で, 最終的な意思決定者として君臨している。